

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 3010 号	氏名	門屋 一貴
審査担当者	主査 梅野博仁 (印) 副主査 光山 厚一 (印) 副主査 久下 亨 (印)		
主論文題目： Changes in Acidity Levels in the Gastric Tube after Esophagectomy for Esophageal Cancer (食道癌に対する食道切除術後の胃管内酸度の変化)			

審査結果の要旨（意見）

食道切除術後の胃管内酸度の長期的な変化について詳細な報告はこれまで見当たらない。本論文は食道切除胃管再建術後の胃管内酸度は術前と比べ有意に低下するが、術後2年では術前と比べ有意差なく上昇することを示した初の論文として高く評価できる。

また、H. pylori 感染群の胃管内酸度は、術後に低下し、術後2年で回復した点も興味深い。血清ガストリン値も食道切除術後に上昇することから、手術で切断された迷走神経幹が2年の歳月をかけて再生するのか、あるいはガストリン産生エリアが増加するのか、術後に胃管内酸度が上昇するメカニズムの解明にも繋がる論分と考える。

胃管内の酸度上昇は、重篤な潰瘍形成の原因にもなる临床上重要な問題である。胃管癌の原因となる H. pylori 感染陽性者の経過観察も含めて、著者が定期的な内視鏡検査を推奨していることは理に適っている。

論文要旨

〔背景〕 食道切除胃管再建術後の逆流性食道炎や胃管潰瘍は、時として深刻な問題となる。我々は以前、食道切除術後1年の胃管内酸度が低下すること、酸度低下が Helicobacter pylori (H. pylori) 感染と関連することを報告した。しかし、胃管内酸度の長期的な変化については不明な点が多い。〔目的〕 今回、食道切除術後の胃管内酸度の長期的な変化を検討した。〔方法〕 食道癌に対し食道切除胃管再建術を施行された89名を対象とし、術前、術後1ヵ月、1年、2年に胃管内24時間pHモニタリング、血清ガストリン値測定および、H. pylori 感染検査を行った。〔結果〕 術後1ヶ月と1年の胃管内酸度は、術前と比べ有意に低かったが、術後2年では術前と比べ有意差を認めなかった。H. pylori 感染群の胃管内酸度は、非感染群と比べ、各時点で有意に低かった。H. pylori 感染群は、術後1年で胃管内酸度が低下し、術後2年で回復した。一方、非感染群の胃管内酸度は2年間の追跡期間中、有意な差は認められなかった。血清ガストリン値は食道切除術後に上昇した。〔考察〕 胃管内酸度は術後低下するものの、2年以内に回復した。食道切除胃管再建術後の酸関連疾患の早期発見のためには、定期的な内視鏡検査が推奨される。